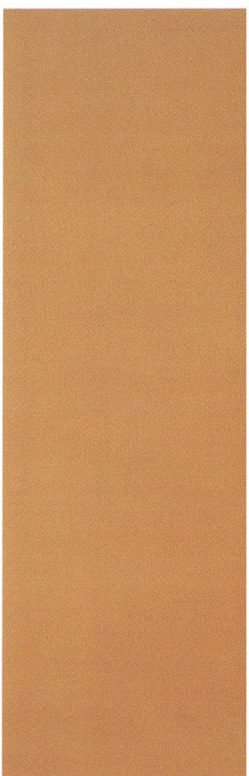
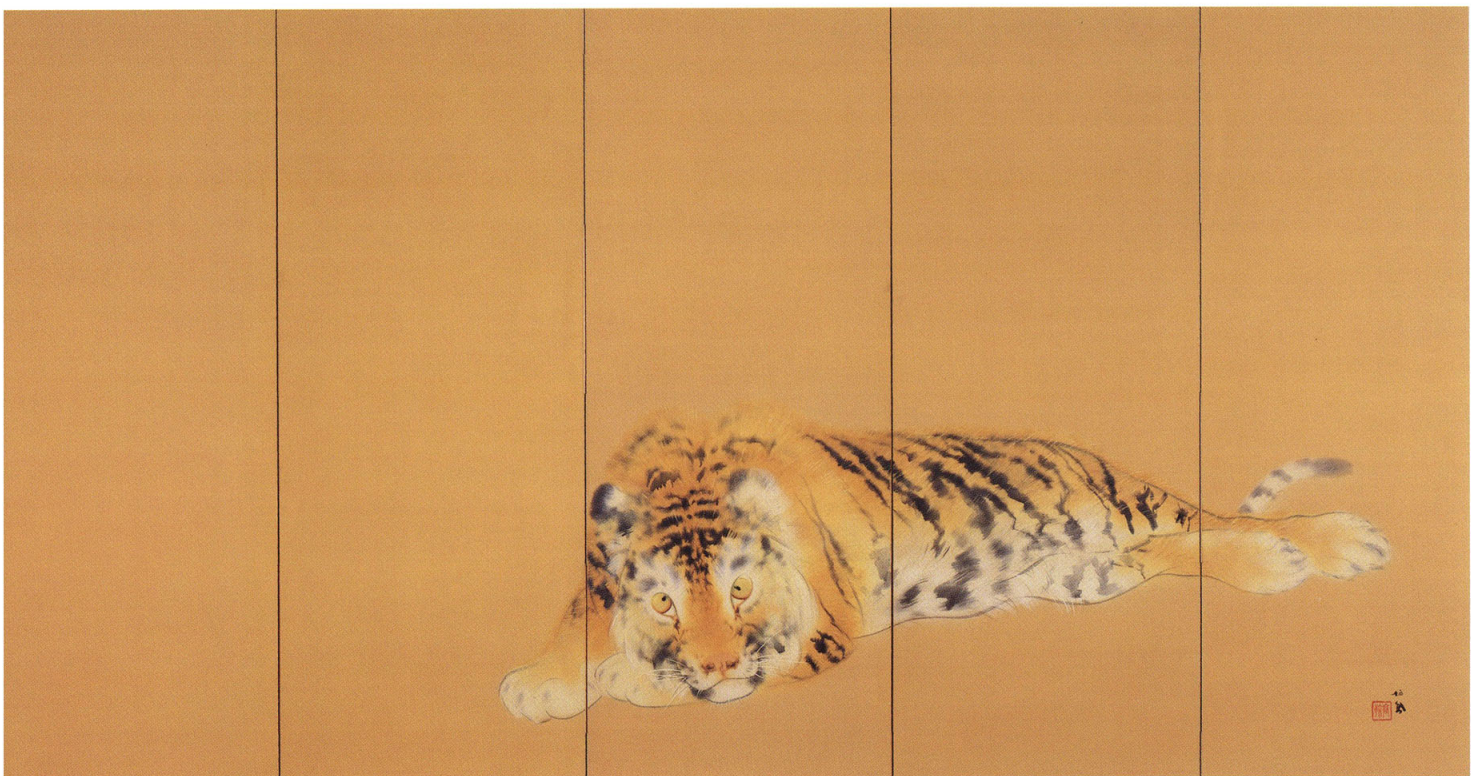


12 虎 竹内栖鳳 六曲一双

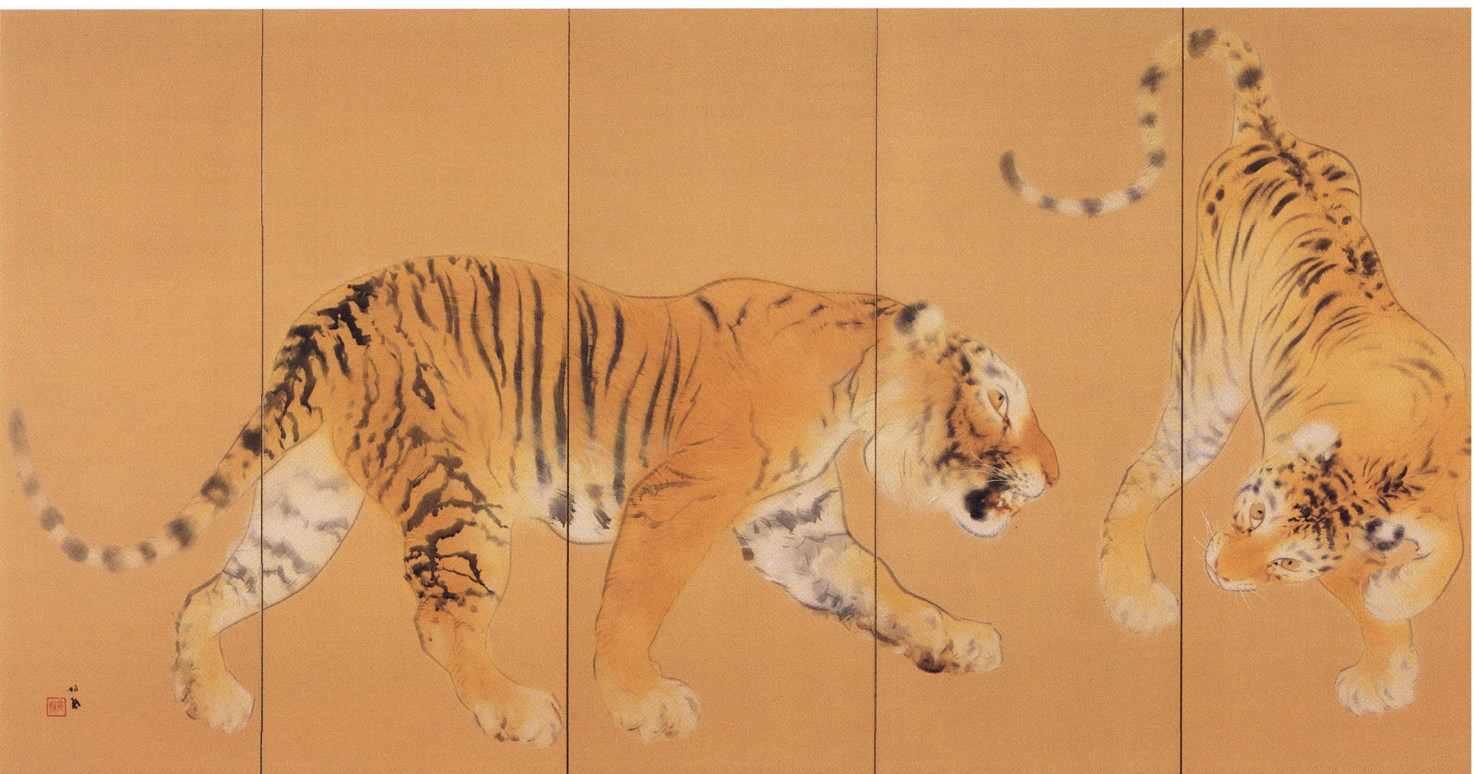
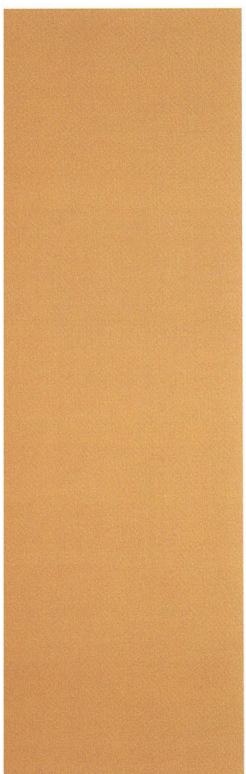
昭和三年（一九二八） 絹本着色 本紙各一七三・八×三九二・一八



昭和の大礼を祝って京都府より献上された作品。作者の竹内栖鳳（一八六四～一九四二）は、幸野楳嶺に絵を学んだ後、西洋画法も積極的に学習し、円山派の画風を大きく展開した画家である。右隻にはごろりと寝そべる一匹の虎を描き、左隻では二匹の虎がじゃれあうように向かい合う。「三虎和衆」の名で当時の新聞にも紹介された、穏やかな雰囲気になった作品である。雄々しい虎は、英雄、豪傑、為政者の喩えに用いられることが多く、栖鳳も昭和天皇の御姿を、この虎に託して描いたのだろう。そしてまた、本来猛獣である虎が和む姿には、幕を開けた新しい御代が泰平であれ、との願いが込められている。

栖鳳は、京都府より屏風の制作を依頼された際、岡崎にある京都市動物園に連日のように通って、虎を観察し写生を繰り返したという。ちなみに京都市動物園の記録によると、ちょうど昭和三年の六月に雄の虎が一頭やってきている。栖鳳は「輸入されて間の無い、野生を失つてゐない虎が一匹居た」（竹内栖鳳「栖鳳清談」『翠彩』二巻四号、昭和十五年七月）と語っている。写生をしたのはこの雄虎と考えられる。そして人念な観察の結果、猛猛に見える虎も、水を飲む時などの些細な仕草は猫と変わらないことを知り、猫を研究すれば虎の習性にも迫ることができるとの結論にいたったという。この絵の虎が獠猛さをひそめ、むしろ見る者をなごませる、飼い猫のような愛らしさを身に纏っているのは、そうした観察結果を踏まえて描かれたためだろう。

余談ではあるが、かつて栖鳳は、明治三十三年（一九〇〇）のパリ万博を視察するために渡欧した際、オランダのアントワープ動物園で初めてライオンを目にしている。かねてより唐獅子や龍、麒麟といった実在しない存在をどのように描くか苦心していた栖鳳は、ライオンを唐獅子のモデルとなった動物と考え、熱心にスケッチした（アントワープでは他にキリンも目にしたが、古くより描き継がれてきた霊獣麒麟とのあまりの違いに驚いたと語っている）。それをもとに、帰国した栖鳳は一時期、迫真的なライオンや虎の絵を集中的に描き、話題を集めた。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

虎・獅子・ライオン

— 日本美術に見る勇猛美のイメージ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 51

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年七月十七日発行

© 2010 The Museum of the Imperial Collections